



まちづくり団体の取り組み  
～こんなことやってます～

日立のシンボルの1つ

“さくら”を活かしたまちづくり

「さくらのまちづくりを進める市民の会」(日立市)

今回は「さくらのまちづくりを進める市民の会」から、ご寄稿いただきました。

## はじめに

日立市は県北東部に位置しており、東は太平洋、西に阿武隈山系が連なる豊かな自然に恵まれた都市です。

穏やかな気候に恵まれ、鉱工業、特に電気機械関連や銅などの製品製造を中心に、明治末期から「ものづくりのまち」として発展してきました。

「日立」の名は、元禄年間、「水戸黄門」すなわち水戸藩第2代藩主の徳川光圀公が、市内中北部にそびえる神峰山(かみねさん)に参拝の折、「朝日の立ち昇る光景は秀麗にして偉大なること領内一」と感嘆したと伝わる故事に由来します。明治22年(1889年)の町村制施行により置かれた「日立村」の名称に地名として初めて採用されました。

## 日立鉱山とさくらのルーツ

今日に到る日立の近代化の礎は、久原房之助による日立鉱山の買収により築かれたものです。

明治38年(1905年)、小坂鉱山の経営を再建した久原は、採算性の低かった赤沢銅山を買収、地元日立村に因み「日立鉱山」と改称しました。そして後年、日立製作所を創設する小平浪平などの電気技術者と共に機械化による近代化を進めました。

この結果、採鉱・精錬技術が飛躍的に向上し、他鉱山からの鉱石買入れと併せて、銅の生産量は明治39年～44年の5年間で約22倍という驚異的発展を見せています。

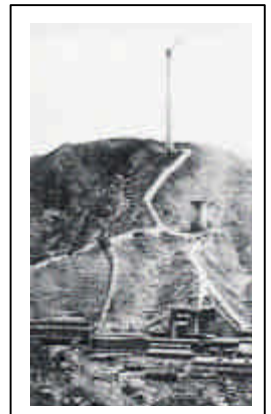
一方、銅鉱の精錬に伴い亜硫酸ガスなどが生成されます。これが放散され、近隣町村の農作物や山林に多大な被害=煙害をもたらしました。

煙害は、当時の多賀・久慈郡一帯、現在の日立市域から常陸太田市、水府・里美村、十王町、高萩市などを含む広範に及びました。特に精錬所がある日立村とその西の中里村の被害がひどく、山林は全滅し人畜にまで被害が及び、中里村入四間では真剣に集団移住を検討する事態となりました。

これに対応して日立鉱山は大正4(1915)年、高さ世界一(155.7m)の大煙突を建設しました。

また、風向観測による精錬調整(制限溶鉱)により煙害の大幅削減に成功しました。

煙突建設までの経過と人間模様は新田次郎の小説「ある町の高い煙突」にも詳しく描写されています。



大煙突と樹木のない山

煙突完成により煙害は激減しましたが、全滅した山林の復旧が次の課題となりました。草木1本も無い急斜面の山は、降雨に伴って土砂を大量に流出させ、洪水の原因となりました。

鉱山では煙害対策と災害対策の両面から試験農場を設置し、亜硫酸ガスに強い樹木の研究を進め、その結果、ヒサカキ、椿、ヤシャブシなどとともに大島桜が煙に強いことが判明しました。伊豆大島の火山地帯に大島桜が自生することにヒントを得たという逸話が残されています。

大正4年の大煙突完成の直後から農場で生産された苗木の植林は、昭和7年(1932年)までに面積1200ha、約500万本という大規模なものでした。このうち、大島桜苗木は約595haの山林に約260万本が植栽されたとの記録があります。

一方、一般住民への苗木無償配布も実施され、大正4年～昭和12年の23年間で、苗木約500万本(うち大島桜約72万本)が供与されたとの記録も残されています。これらの大島桜と、その育苗技術を活用して工場や社宅周辺に植えられた染井吉野(ソメイヨシノ)は、現在市街地に約14,000本ある「日立のさくら」のルーツとなっています。



サミット桜の施肥作業(かみね公園)

### さくらのまちづくりを進める市民の会

このような日立市で、さくらのまちづくり市民活動に取り組んでいる団体が二つあります。さくらのまちづくりを進める市民の会(以下、「さくら市民の会」)は、平成9年(1997年)1月に、公募により集まった市民会員を中心としたまちづくりボランティア団体です。もう一つが、「花樹(かじゅ)の会」です。これら2つの市民団体が、両輪として協働しながら活動を進めています。

さくら市民の会の会員は、現在72名。次の3つの活動を中心に運動を展開しています。

- サクラ(樹)の調査・植栽・育成
- さくらまつり・イベント等への協賛出展
- 人材育成、さくら資料・情報の収集と発信

### サクラの調査・植栽・育成

桜名所は、やはり「平和通り・かみね公園」です。

平和通りは、日立駅から国道6号まで約1kmの区間に、主に昭和26年(1951年)と昭和52年(1977年)に植えられた、116本のサクラ並木が連なっています。また、市街地を一望できるかみね公園には約1000本の様々な種類の桜が植えられており、4月下旬頃まで花を楽しむことができます。

これら2カ所は、平成2年、(財)日本さくらの会から、「日本のさくら名所100選」に選定されています。いずれのサクラも毎年立派な花を咲かせ、見る人の目を楽しませてくれますが、専門家である樹木医などの意見を聴くと、樹木の高齢化やテングス病の進行、通行車両による被害(平和通り)などを受け、木が弱っているため、土壌改良(かみね公園)など、今後の対策が必要となっています。

平成13年4月には、「さくらによる町おこし」を進めている全国18市町村の首長が一堂に会し、「さくらサミット in ひたち」が開催されました。

このサミットでは、全国各地から28本のサクラ苗木が集められ、記念植樹が行われました。各地の桜名所から寄せられた「わが町自慢の桜」ですから、大切に育てなくてはなりません。さくら市民の会では、植栽された28本の桜苗のために、真夏の水遣り、冬の寒肥え(かんごえ)、5月のお礼肥えなどの手入れを自主的に進めています。

### 日立紅寒桜の苗木育成

日立市の小木津駅東口広場にあった寒桜は一般の寒桜より紅色が濃く、早い年には2月下旬に開花する少し早咲きの珍しい桜でした。

そこで、この寒桜を日立特産の桜として広めるため、さくらサミットを機会に、市民公募により「日立紅寒桜(ひたちべにかんざくら)」と名付けました。

さくら市民の会では、親の新芽を大島桜などの台木に接ぎ木して苗木を育成する「芽接ぎ」という方法により苗木を作ることになりました。

平成12年から、結城市田間にある「日本花の会 結城農場」の多大なる御協力を得て、これまでに約100本の苗木を育成してきましたが、そのうち最初の苗4本を、昨年11月に初めて日立市内の公園に植えることができました。

また必要な時いつでも移植できるように、苗畑を手配して、この2月に約20本の苗木を結城農場から移植してきました。これを大切に育てて、市内の施設や公園などで要望があれば、随時、移植して行きたいと考えています。



日立紅寒桜の苗畑地ならし作業

\*\*\*\*\*

問合せ先：日立市都市政策課 佐藤祐一

0294 - 22 - 3111 内線 270

(編集委員 T.A)